「よそ者」も守る日本の農地

～農地を守ることは地域を守ること～

山口大学エクステンションセンター
辰己佳寿子

１．なぜ、今、「むら」と「農地」なのか

農業と人間との関係は、人間が自然の一部として自然に対し働きかけ、自然の循環の一部を担うダイナミックな関係であり、人々は、社会集団や社会的文脈から離された生物体としての個人（individual）ではなく、社会集団のメンバーとして存在する個人（person）である（山本 1972）。

自然の偉大さを感じる時、人間は謙虚になる。それは、以下の農家の言葉に象徴される。

「農業は本当に大変ですよ。割りにあわないこともありますが、植えたものから芽がでてそれを収穫するというのは心が動かされます。これが農家の醍醐味ですね。」（山口県阿武町Ｎさん）

「早朝、山から、大きくて赤く輝く太陽をみたときに、どんなに忙しくても、思わず手を合わせて拝みます。自然の力は素晴らしくて偉大だと知らされる瞬間です。」（山口県周南市Ｙさん）

いわゆる「むら」は、自然および生命体（動植物）との共存過程を維持しながら、生産と生活において協働（協同・共同）し、相互行為・社会関係が一定範囲の「土」の上に集積した、自主性と自律性をもった秩序ある社会的総体である。そこには農家の誇りと文化、農の哲学（こころ）が存在する。

そもそも、人のいる「むら」の風景と「土」は、生命そのものとしての「土」であり、「土地」とは意味合いが異なったものであった。しかし、「土」は、「土地」として農業者にとっては生産手段であると経済学的には捉え、農業経営学では、労働、資本とともに農業経営の三要素の一つとなり、こうして「土」は「土地」として資本主義的生産、あるいは企業的農業経営の理念とされたのである。安達（1979）は、本来、「土」は、単なる生産手段や要素のひとつではなく、家族労働の場であり、生活を支えてきた貴重なストックであって、生きることの全てであった、と強く主張した。

戦後の経済・社会の急激な発展によって、「むら」の過疎化や高齢化が加速し、離農が進み、農地が放棄され、今、「むら」が危機的な状況を迎えている。昨今は、都市に暮らす人々が増え、生活スタイルが多様化しているため、地域社会を意識しなくても生活していくことが可能であるが、そういう時代的風潮であったとしても、人々の暮らしには、全人格をもって感情的に互いに融合する「むら」的な社会関係が重要なのではないだろうか。「むら」の問題は、「むら」だけの問題ではない。人間の生き方を問う重要な課題なのである。2011 年 3 月 11 日の東日本大震災によって、自然からの恵みをいただくことの素晴らしさ、食べるものを生産する農業の重要性、人と人とのきずな、豊かさとは何かなど、今こそ、足元を見直す時なのである。我々の足元には、「土」がある。「農地」がある。

２．「よそ者」が「むら」と出逢うとき

いわゆる「近代化」とは、ある意味、画一性、普遍性をもっている。1990 年代に「マクドナルド化する社会」（リッツア 1999）という言葉が登場したように、画一化されたシステムに入ると人々は安心する傾向にある。システムに慣れた人々が、多様性をもちダイナミックに動く「むら」と出逢うとき、大きな衝撃を受けることがしばしばある。

筆者が日本の「むら」の調査を始めた 1990 年代前半、地域のリーダーからお叱りを受けた。

「あんたは、どれだけわしらのむらのことがわかっとるんか？」

「『よそ者』がなんぼのもんじゃ！」（広島県北広島町Ｉさん）。

この言葉には､必死でむらおこしをしようとするＩさんの真剣な思いが籠められていた。当時の筆者の発言は、本やマスメディアから借りてきた画一的な言葉であり､「当事者」意識をもっているように振る舞っていたが、単なる冷やかしにしかすぎなかった。筆者の言動は､「むら」の人々の誇りを傷つけるものであったのである。ハッとした、恥ずかしいと感じた。

2003 年に山口大学に就職してからは、山口県の「むら」に足繁く通うようになった。ここでもボディーブローのような衝撃を受けた｡山口県阿武町での自己紹介の一場面である。「きこりの○○です」「漁師の○○です」「林業振興会の○○です。ほうれん草を作っています」「青年協議会の○○です。乳牛をやっています」「役場職員の○○ですが、スイカを作っています」と、阿武町の人々は自分の生業（なりわい)、つまり生きるための専門性をもって自己紹介したのである。どの言葉にも、自然や生命体とかかわりながら阿武町という「土」のうえで「むら」の一員としての「当事者」意識をもって生きている力強さがあった。

このとき、筆者は､「山口大学の辰己です」と所属先しか言えなかった。恥ずかしさと座り心地の悪さを感じた。まさに「私」が問われた瞬間であった｡「むら」は、所属先や役職、資格などではなく、どういう人間なのかで勝負する場所なのである。それ以来、私はいったい何者なのか､「よそ者」がどのようにしたら「むら」にうまくかかわっていけるのか、を模索し続けてきた。「むら」の人々との出逢いは、筆者の生き方に大きな影響をもたらしてくれた。「むら」には、人を人間として成長させる懐の深さがある。

３.「よそ者」意識と「当事者」意識

昨今、むらまち交流やUJI ターン推進のための取組が実施されており、「よそ者」が「むら」とかかわる機会が増えてきている。むらづくりには、それがいかに内発的なものであっても、常に外部からの情報や資源等が不可欠となっており、「よそ者」が「むら」にどのような風を送り込んで「息吹」とするかが重要である。「よそ者｣といってもひとくくりにはできず、さまざまな立場の人々がいる｡｢よそ者｣は、「むら」の外に住んでいる人と思われがちだがそうではない。

Ｆさん（女性）にたずねた際の会話を紹介しよう。

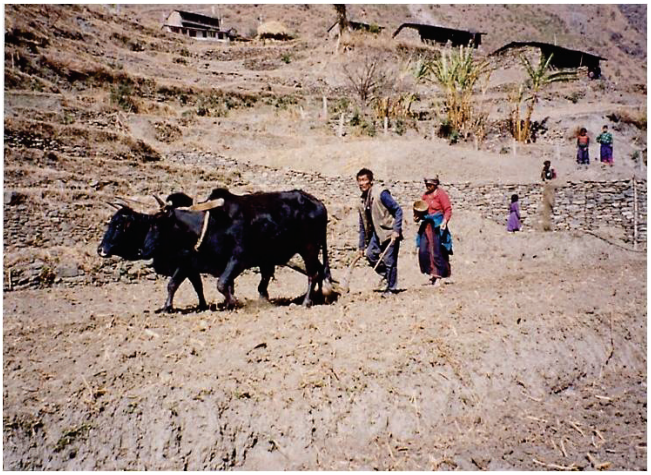
Fさん：「私は、ここでは『よそ者』なんですよ」
筆者：「えっ？、嫁いできて何年ですか？」
Fさん：「40年以上になりますが、まだまだです」
筆者：「･･･、出身地は、町外ですか？県外ですか？」
Fさん：「隣の集落です」

Fさんは、隣集落から嫁いできて40年以上経つのに、まだ「よそ者」というのだ。Fさんの場合は、「よそ者」意識がゆえに「まだ地元になじんでいないから地元に何ができるか」という姿勢でむらづくりに積極的に取り組んでいる。「よそ者」意識が良い意味でむらづくりに活かされているのである。

一方で、「むら」の外に住む「よそ者」は、そこに住めないとしても「当事者」意識をもってかかわることができる。「よそ」にいる立場の者が「当事者」意識をもたない限り、「お客さん」で終わりである。「よそ者」のなかには、「むら」を手段として利用して終わりというフリーライダーも存在する。「むら」は、農産物を生産する工場ではなく、「土・農地」の上で自然との営みを行う人々の関係性が集積された生きた社会である。「むら」は生き物のように脈を打っている。「むら」の脈が読めるかどうか、脈打つ「むら」にどのようにかかわることができるか。そこには画一的なマニュアルはない。

究極の「よそ者」ともいえる、アフリカのザンビアから来日したBさんが、2008年に山口県の「むら」を訪れた時、「ザンビアと日本を比較すると日本の方が発展していますが共通点を発見しました。『むら』への帰属意識、所属意識、メンバーシップです」とコメントをしていた。国が変わっても、言葉がわからなくても、「むら」を知る人は、他の「むら」の脈が読めるのである。

４．究極の「よそ者」から見た日本の「むら」と「農地」



筆者が、海外で初めて「むら」の人々に人間として出逢ったのは、ネパール・ヒマラヤであった。道は舗装されておらず、公共交通も乏しく、移動手段は徒歩が基本で、電気もストーブも水道も電話ない、さらには、トイレもない家もあり、いわゆる「低開発」地域である。しかし、そこには自然および生命体との共存過程を維持しながら、可能な限り、食糧を自給し、共同体的な身の丈にあった暮らしがあり、家族・親戚、「むら」の社会関係が大切にされていた。そこでの畑や水田は、灌漑設備や水源に乏しく、多くが天水に頼っており、昔ながらの伝統的な技術で農業を行っている。収量は、天候に左右され不安定である。それに比べて、日本の農地は、灌漑施設が整い、水源が十分に確保された優良耕作地なのである。

いわゆる「開発途上国」から来日した外国人が異口同音に言うのは、日本の「むら」は、社会インフラがこんなに整っていて、優良耕作地であるにもかかわらず、「なぜ人々は『むら』から出ていくのか」「なぜ、こんなにも多くの優良な農地が放棄されるのか」ということである。このような質問が出るのは、彼らの国では、目下、社会インフラ整備こそが「む

ら」の経済活性化に不可欠であると優先的に取り組んでいるからである。彼らは、日本の「むら」の風景が理想的であったとしても、行きつく先が過疎や離農なのであろうかと複雑な心境を隠せない様子であった（安藤 2011)。ここに、日本の「むら」と「農地」の問題が、政治・経済的な側面だけでなく、価値観や文化などを含む社会的・精神的な側面をもつ複雑な問題であることが見てとれる。

アジアで急成長を遂げた日本は、いまや、過疎化、高齢化の「課題先進地域」となっている（小宮山 2007)。アジアでも、今、「むら」の過疎化、高齢化の問題が浮上し始めており、「むら」と「農地」の問題は、アジアの問題でもある。日本の「農地」は、一朝一夕で作られたものではなく、先人たちの長年の技術や汗水が蓄積されたアジアの「むら」の遺産であり、誇りである。

さまざまな立場の「よそ者」が、「むら」の人々と共に協働（協同・共同）しながら、日本の農地を守ること、それは「むら」の遺産や誇りを守ることでもある。このプロセスは、「よそ者」が単なる労働者としてかかわることではなく、グローバルな視点から日本の「むら」と「農地」の重要性を捉えながら、ローカルな「むら」で「当事者」意識をもって行動を起こすことである。

［参考文献］

安藤和雄、2011、「農村研究の視点－在地の絶対肯定」『地域の発展と産業』、放送大学教育振興会、158-163。

安達生恒、1979、『むらの再生』、日本経済評論社。

日隈健壬・辰己佳寿子、2008、『土と人とむらと』、広島修道大学学術交流センター。

小宮山宏、2007、『課題先進国日本』中央公論新社。

リッツア・ジョージ、1999、『マクドナルド化する社会』(正岡寛司監訳)、早稲田大学出版部。

辰己佳寿子、2009、「地域と出逢う－連続するアクション」『九州人類学会報』第 36 号、26-41。

徳野貞雄・辰己佳寿子、2011、「ネパール近代化の光と影」(5 月 21 日西日本社会学会 69 回大会にて報告)

山本陽三、1981、『農の哲学（こころ)』御茶の水書房。

山本陽三、1972、『風と土と人と』、御茶の水書房。